化粧品OEMの開発最前線

第一線技術者からの最新提案

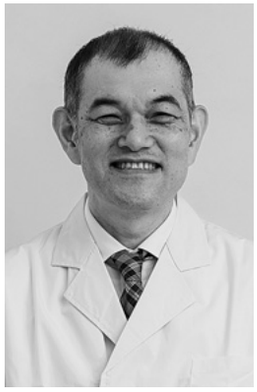
近年の化粧品市場では、各社の販売競争が激しさを増しており、差別化できる商品開発を求めるニーズがいっそう強まっている。一方で、グローバル化の進展や環境対応意識の高まり、消費者行動の変化などにより、開発環境は複雑さを増している。化粧品OEM・ODMの最前線で活躍する開発者に現在の取り組みや最新の提案材料を聞く連載企画「化粧品OEMの開発最前線」。今回は、ジャパンビューティプロダクツ（東京都中央区銀座）の細川欣哉・開発部長に登場頂いた。

＊　＊　＊

――貴社の開発部門の特長は。

「当社は第一事業部でOEM、第二事業部で生活協同組合向けの自社ブランド製品を提供しており、現在10名の開発部員が研究開発を担当している。特長の一つは、営業や企画のメンバーと非常に活発にコミュニケーションを図っている点にある。オフィス内でも両部署がすぐ近くに位置しており、常に情報交換を行うことにより、お客様のご要望に迅速に対応することが可能だ。また、福島県に構える工場のメンバーとも定期的にオンラインでの打ち合わせを行ったり、工場での研修やテストに参加するなど、工場との連携も密に取っている。ステークスホルダーとのコミュニケーションについても、本社が銀座にあるという地の利が強みとなっている。さらに、開発部には他社から転職してきたメンバーも多数在籍しており、各自が持ち寄った知見を取り入れて新たな価値を生み出すことを得意としている。多様なノウハウを融合することで、新しいものづくりが可能になると強く感じている」

ジャパンビューティプロダクツ
開発部長
細川　欣哉氏



――化粧品OEM企業の開発者の立場から、最近の化粧品市場の動向をどう捉えているか。

「もっとも特徴的なのは、消費者の購買行動やライフスタイルなどが多様化し、セグメントがより複雑になっている点だ。そのような状況に対応するには、製品ごとに明確にターゲットを絞り、マーケティングにおける〝ペルソナ〟を描いて共有することが重要だと考えている。当社は小ロットにも対応可能であるうえ、意思疎通や意思決定がスムーズで、製品化までのスピード感にも優れている。小回りが利く点は大きな強みだ」

――今後予想される市場環境の変化と、それに対する開発方針は。

「今後の市場環境の変化では、クリーンビューティーに注目している。国内では、肌に優しく安心・安全な処方を求める傾向は根強いが、最近では海洋汚染や動物実験、長時間労働や児童労働といった倫理的課題を含むエシカル消費の観点も重視されるようになってきた。当社としても、環境負荷の低減や倫理的配慮を取り入れたクリーンビューティーの流れに対応し、提案処方のさらなる充実を図る方針だ」

多彩なノンケミUVでニーズ即応

―クリーンビューティー対応に力点―

――貴社が提案するイチ押しの開発アイテムは。

「当社のノンケミカルUV処方は、まさにそうした潮流に合致するものである。当社独自の粉体分散技術により、酸化亜鉛や酸化チタンを使用しながらも沈降しにくく、そのまま噴射できる『ノンケミカルUVミスト』は引き合いが多く、すでに製品化実績もある。さらに『ノンケミカルジェリーUVミスト』は、容器内ではジェリー状、吐出時に力が加わると液体に変化し、肌の上で静止すると再びジェリー状に戻るというユニークな処方だ。従来処方に比べて液だれしにくく、子どもにも使いやすい。そのほか、ノンケミカルUV処方の豊富なバリエーションがあり、ニーズに応じた提案が可能だ。また、まつ毛美容液処方も、近年引き合いが多い。今年、目周り品向けの充填機や省人化設備を新たに導入する予定であり、さらなる付加価値を持つ製品の開発が可能になる見込みだ」

――最後に、OEMの技術者としての醍醐味、やりがいを教えて欲しい。

「当社ならではかもしれないが、必ずしも万人に受け入れられる製品ではなく、ニッチな分野を狙える自由度がある点が魅力。また、当社から提案するいわゆるODM処方の開発は、スケジュールに余裕を持たせた中長期的な取り組みが可能であり、顧客や企画担当のアイデアを実現するさまざまな処方開発に挑戦できる点も大きなやりがいだ」

（文責・成瀬）